The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	提言　二十一世紀「国際都市」としての大阪を確立する
Author(s)	辻野, 直三郎
Citation	makoto. 1982, 38, p. 2-3
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86070
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

提言　二十一世紀の「国際都市」としての大阪を確立する

財団法人　大阪防疫協会
理事長　辻野直三郎

沿革

大阪城は後奈良天皇の室町時代、一五三二年（天文元）に、本願寺証如が山城山科（京都府）から移って来て、石山（現在の東区馬場町）に本山を置き、ここに城郭を構えたことに由来する。

規模

石山本願寺は八町四方（一町は一〇九㍍）御堂を中心として諸坊、門前町が発展した。顕如のとき織田信長がこれを攻めたが落城せず、朝旨によって顕如は紀伊、鷺森に退き織田信長の所有に帰した。信長の死後、豊臣秀吉が収めてこれを修築し、三〇余国から数万人の人夫を徴発して一五八五年（天正十三）に工事は見ごとに完成した。この時の城の外郭は北は玉造、西は東横堀川で区きり、周囲三里八町（一里は三、九二七㎞で当時最大の城郭であった。内郭は本丸を一段高く石垣で築き天守を建て、南の広場に「殿館」を建てた。殿館は大玄関、千畳敷、大広門、大台所、黄金殿斗付間、田楽之間、鎖之間などがあったが、その規模を的確に知り得る資料は現在なにもない。またこれらの巨石巨岩を、如何なる方法で運んだかは今迄謎とされている。（一説には瀬戸内海より運んだとの説もある）。本丸、山里丸を合せて二二、〇〇〇坪（一坪三、二〇五㎡）二の丸は本丸をかこむ周辺一帯の地域で真田郭、条丸郭、算用郭、前島郭があり、その外を三の丸でかこみ総面積一〇〇万坪をこえたものであって、乱世を統一した豊臣秀吉の権勢を誇るものとして相応しいものといえようか。

昭和に入って復興の天守は、外観はだいたい黒田屏風によっていたもので秀吉時代のものとは規模が異なる。その外に現存する建物は本丸、大手門の楼門、本丸内に金蔵（かねぐら）二の丸に乾（いぬい）櫓千貫楼、火薬庫、南曲輪（くるわ）に一番櫓、六番櫓、大手門などがある。この中で乾櫓の工事方法が最も古く、元和修築に他所より移築された感があるが現在重要文化財に指定されている。千貫櫓はそれにつぎ、元和頃のものとされている。一番、六番両櫓は寛文の大改造と思われる。火薬庫は純石造の建築で、極めて珍しいものであり追手門学院附近より望見することができる。現在

の天守閣は一九三一年十一月に完成したものであり桃山建築の様式をとりいれた鉄筋コンクリート造、延べ一、五三四坪高さ五六m（石畳上四二m）に及ぶもので内部にエレベーターが設備されている。閣内には桃山時代（註）の美術品が常時展示され、また内堀内と大手門附近ならびに大手門前広場は、人影たえることない大阪城公園となっており、桜の頃となると多数市民の憩の場所となっている。

（金明水、銀明水）の井戸（肥後石）（蛸石）などの巨石その他の史跡が多く観光価値は甚だ大である。

かくの如く大阪城は、整備されて以来ここに四〇〇年の歳月を経過するに至った。この際多くの先人の努力に感謝する一端として、大阪府市民は勿論多くの国民の憩（いこい）の場として、大阪城をさらに一層声高らかに商都大阪のシンボルとして、宣伝すべきであるまいか。一案としてこの際各方面の有識者の会合など持つことは特に必要なことと愚考する。

敢てここに提言する。多謝

参考資料世界百科事典、

註　桃山時代とは

豊臣秀吉の府を桃山城、即ち伏見城に置き治世の局にあたった時代で、天正十年本能寺の変後より慶長五年関ヶ原の役前に至るまで十八年間である。

昭和五二、二、一読売新聞によると、大阪城の石垣に記載された「墨書名」によれば、石垣築造にあたった大名の家紋や石を切出した地名、工事のときに使った寸法などを刻印した石が見つかり、築城解明の手がかりになっているが、「松平宮内少輔」と官職名がはっきり書かれた「墨書石」は極めて貴重な発見である。京橋口の石垣が岡山藩池田家の手でつくられたことを示すこともまた貴重な「物証」である。

墨書石が見つかったのは、京橋口をはいってすぐ右側の石垣。さる昭和四十九年末から修覆工事が始まり、五十年四月日本古城友の会事務局長藤井重夫さんが崩された石を点検するうち発見、心ない観光客にいたずらされないようこの事実を二年近く伏せてあった。

墨書は下から二段目の石（縦一、二四メートル横一、三八メートル奥行き三、三メートル）の奥面と横腹、さらにその上のやや小ぶりな石の横腹と計三か所にあり、石組みを崩すまではいずれも見えない面だった。さすが消えかかってはいるが、かなりな達筆で「松平宮内少輔」とあり、備前岡山の二代藩主池田忠雄（三十一万五千石輝政の子）の官職とわかった。大阪城の石垣築造の工事分担を示した文献「丁場割図」にも京橋口は池田氏の分担だったと示されているが、これまでは京橋口正面の大阪城で三番目に大きい石（最大高五、三八メートル最大長十三、三七メートル広さ五十四、一七平方メートル）が「肥後石」と呼ばれることなどから肥後、加藤家が作ったという説の方が広く知られていた。こんどの発見はこの「俗説」を否定、改めて文献の正確さを証明した。また墨書石の質を調べたところ、瀬戸内の大島（岡山）産の花コウ岩とわかった。

大阪城は豊臣秀吉が天正十一年（一五八三）から築城、大阪冬の陣（一六一四年）で外堀が埋められ、夏の陣（一六一五年）豊臣氏滅亡後、徳川家康の外孫、松平忠明が伊勢、亀山（三重）から移封され十万石の大名として城に入った。五年後に忠明が奈良、郡山に転封された後は幕府直轄となって大阪城代が置かれ、元和六年（一六二〇）から寛永年間にかけての十年間、秀忠、家光の二代にわたって大がかりな修築が行われた。池田家が京橋口石垣の築造をしたのはこの大修築の第一期にあたる元和六年の工事。幕府は池田家など西国大名六十四家に工事を命じたという。

暴言多謝